

応仁の乱と京都

―都の衰退と復興―

下坂 守

はじめに

- 一、応仁元年の兵火
―二条より上は東西南北ごとごとくこれを焼く―
- 二、構と堀と井楼せいろう
―小櫓高壘、浚壕深塹、周しゅう 匝重々―
- 三、孤立する東軍の「御構」
―東方様はただ籠のなかの鳥の如し―
- 四、文明六年の和平
―橋を懸け自他の人々往反す―
- 五、乱の終焉と町の復興
―大裏だいりは五月の麦の中―

むすび

〔乱勃発時の東西両軍の諸大名〕

東軍 細川勝元 畠山政長 山名是豊 京極持清 斯波義敏 赤松政則 武田信賢
西軍 山名宗全 畠山義就 大内政弘 六角高頼 斯波義廉 土岐成頼 一色義直

〔応仁の乱略年表〕

応仁元年（一四六七）正月 畠山義就が上御霊に畠山政長を攻める（御霊林の合戦）
五月 東軍が山名宗全を攻める〔東軍↓西軍〕
八月 大内政弘（西軍）が入京する
九月 西軍が細川勝元（東軍）を攻める〔西軍↓東軍〕
十月 西軍が相国寺に陣を取る〔西軍↓東軍〕

応仁二年（一四六八）四月 西軍が井楼（高さ七丈）を建てる
文明二年（一四七〇）七月 「東方様ハ只如籠中鳥也」（大乘院寺社雑事記）
文明五年（一四七三）三月 山名宗全死去
五月 細川勝元死去
文明六年（一四七四）四月 山名政豊と細川政元が和平

七月 大内政弘・畠山義就が北野に山名政豊を攻める
九月 大内政弘が降を幕府に請う
文明九年（一四七七）十一月 大内政弘・畠山義就が京中の陣を自焼し没落する
文明十一年（一四七九）二月 室町第造営事始
四月 土御門内裏修造事始
十二月 後土御門天皇が土御門内裏に還幸する

〔見学ルート〕

上御霊神社 ↓ 相国寺 ↓ 花の御所遺跡（同志社大学寒梅館） ↓
百々橋跡 ↓ 「山名宗全旧跡」碑 ↓ 西陣碑 ↓ 一条戻橋

はじめに

1 「応仁記」一 御霊合戦之事（畠山右衛門佐上洛之事）
「コノ屋形ハ要害モナキ平原ニテ、殊猛勢ヲ引受テノ合戦難 成存候。懸モ引モ折ニ
ヨルト申事ノ候ヘバ、爰ニ颯ト打捨テ、是ヨリ上御霊ヘアガツテ、藪ヲ小楯ニ戦ハ、
一端拘ヘ候ヒナン。万一合戦及難儀候トモ、京兆（細川勝元）ノ矢倉ノ前ニテ候ヘ
バ、サリトモ無下ニ討死セサセテヨモ御覧セラレ候ハシ」（中略）
十八日ノ早天ニ御霊ヘコソハ押寄ケレ、此御霊ノ森ノ有様、南ハ相国寺ノ藪・大堀、
西ハ細川方ノ要害ナレバ、責口、只北ト東ノ口ヨリ攻入ト下知シケレバ：

2 「応仁記」三 洛中大焼之事 「飯尾清方の歌」
汝ヤシル 都ハ野辺の夕雲雀 アカルヲ見テモ 落ルナミタハ

一、応仁元年の戦火 ― 二条より上は東西南北ごとくこれを焼く ―

① 正月18日 西軍（畠山義就） ↓ 東軍（畠山政長） 上御霊の合戦

② 5月26日～5月30日 東軍 ↓ 西軍 上京の合戦

「北は船岡山、南は二条辺にいたり日夜焼亡なり」（史料2）
6月11日

東軍一色政氏屋形（中御門堀川）自焼、近衛以北（二条以北とも）が焼ける（二条町を上下ニ焼了）（大乘院寺社雑事記）

8月21日 大内政弘（西軍）入京

③ 9月13日～14日 西軍 ↓ 東軍 室町御所の合戦

「内裏仙洞東西南北大路焼失也、但両御所無為」（宗賢卿記）

「二条より上、北山東西ごとく焼野と成てすこぶる残る所ハ將軍の御所計也、禁裏・仙洞ハ定て陣屋と成」（応仁略記）

④ 10月3日～10月20日 西軍 ↓ 東軍 相国寺の合戦

「ことごとく相国寺焼亡す。畠山右衛門佐殿勢これを焼く。二条より上は東西南北ことごとくこれを焼く。北畠ノ塔計残り了んぬ」（東寺長者補任）

二、構と堀と井楼 ― 小櫓高壘、浚濠深塹、周 匝重々 ―

3 「大乘院寺社雑事記」 応仁元年（一四六七）五月二十二日

一条以北自他構城、諸方難儀此事也云々。（中略）
五月廿五日、珍事既に出来ず。諸大名両方ニ相分るるもの也。畠山政長方は細川右京大夫一家、京極入道一家、赤松次郎法師政利 六角四郎政高 武田大膳大夫、山名弾正、これらの輩、室町殿を以て城の構となす。

以上、東方と号す

畠山義就方は、山名入道以下一門、斯波義廉領也、六角龜寿丸 土岐、一色、これらの輩、堀を小路・大路に切り、城の構となす。

4 「大乘院寺社雑事記」 応仁元年五月二十九日

二十六日より毎日所々において合戦、ならびに焼亡もつての外の次第なり。北は船岡

5 山、南は二条辺にいたり日夜焼亡なり。
〔後知足院房嗣記〕応仁元年五月三十日
方々要害に堀を掘る由申せしむるの間、侍どもに仰せ付け鷹司面に掘らせしめ了んぬ。

6 〔皇年代私記〕応仁元年六月一日
今日より一條大路、兩陣の間、溝を掘る。口二丈計、深さ一丈と云々。

7 〔碧山日録〕応仁二年（一四六八）正月二十九日
〔松田秀善〕幸 子東軍より来たる。語るに以て、深塹高壘、要害の甚だしきはこれを見ざるもの意度のおよぶところにあらざる也。軍士多く紅綃・素練を割き、小旗旛を造りて腰間に挟む。（中略）幸又曰く、和州の匠、営中に来たり、石木を発するを造る。その石中るを 尽 摧破すと云う。予曰く、砲也。

8 〔経覚私要抄〕応仁二年四月十五日
〔宗全〕楠葉備中語 云、山名方 西楼既にこれを上ぐ。細川の城を責めんがためと云々。一丈二尺柱九口面四間西楼と云々。火矢・石ツカテ・土石ヲ上に置くと云々。大内介モ西楼を用意すと云々。これ又非常の支度と云々、此西楼を上ぐるは、大責あるべきの由風聞すと云々。

9 〔碧山日録〕応仁二年四月十四日
〔山名〕西陣宗全の城、西楼を立つ。其高七丈余と云々。
〔五月二十七日〕客曰、東陣高き戍楼を抗る。上頭にいたらば、下に諸軍営を視ると云う。

〔十一月六日〕東南に兵櫓あり。高さ十余丈。万年（相国寺）の塔と相上下す。小櫓高壘、浚濠深塹、周匝重々。敵陣またかくの如き也。その間、士卒の往来、億万計り也。

10 〔重編応仁記〕応仁二年
〔かく〕角テ西方ノ陣ニ、日番・夜廻等隙透間無く相勤メテ、敵味方ノ構ヘトモ、日夜犬牙相對スレバ、合戦ハ無く、徒ニ何限リト無く守リケル。

三、孤立する東軍の「御構」 ― 東方様はただ籠のなかの鳥の如し ―

11 〔経覚私要抄〕応仁二年（一四六八）正月
〔勝元〕細川右京大夫の陣の事、丑寅口一方ナラテハ不閉、その余は 悉 山名・大内介以下取り巻くと云々。よつて九條より蔵人参る時ハ、三日ニ山へ廻テ鞍馬口へ出テ入城すと云々。

12 〔後法興院記〕応仁二年正月四日
京都の通路、去年の九月の比より山名一揆の徒党充滿す。而公武の通路を留め了んぬ。

13 〔大乘院寺社雑事記〕文明二年（一四七〇）七月二十三日条
筒井方より申し給う。山城宇治・水牧・山階等ことごとく以て、東方没落十六人。細川

14 〔言国卿記〕文明六年（一四七四）正月十三日
方披官十二人西方ニ降参し了んぬ。（中略）東方様はただ籠のなかの鳥の如きなり。

一今朝御暇、乞ニ御所へ参り、申し入れたんぬ。宮御方・女中ナトヘモ申す。伏見殿・同宮御方へイトマコイニ参るなり。源中納言・飛鳥井陣屋へ罷るなり。

一九時分ニ、西タウ越ニ坂本へ下り了んぬ。供、兵衛・中務少輔・掃部・将監・智阿弥なり。七ノスキニ下りツキ了んぬ。祝アリ。

一夜ニ入り、執当坊礼ニ来り了んぬ。予ヤナキ一桶、二色モタセ罷るなり。祝言ばかりノト酒アリ。御サルミヤケニ、犬ハコーツ、スカハス也。

（二月二十九日）

一今朝、山越に上落し了んぬ。少将同道なり。

15 〔言国卿記〕文明六年（一四七四）四月一日

一少将ヲ予同道シ、山コへニ下るなり。九時ニ下りツクなり。

（五月十五日）

一今日、伏見殿宮御方御元服ノ御礼ニ上るなり。山越ナリ。九時分ニ京陣屋へノホリ

ツキ了んぬ。予供、兵衛・中務少輔・掃部助・智阿弥なり。その外チウケン共少将ヲ同道スルなり。

16 〔言国卿記〕文明六年五月十六日

一今日、罷り下る御暇、乞ニ参るなり。若宮御方これに同じ。

一山越、坂本へ下るなり。少将同道スルなり。予供ハ、兵衛・少輔・掃部助ナト也、

（六月十八日）

一今朝、山越予上る也、二位坊ヲ同道シ了んぬ。予供、兵衛・少輔・左衛門・掃部ナリ。

河原マテ又ムカイニ、イヤ六来り了んぬ。

一陣屋へヒル以前ニ上りツキ了んぬ。酒アリ。

17 〔政所 賦銘引付〕文明十一年（一四七九）閏九月二十九日

一、岡田太郎左衛門尉吉久 一閏九廿九

三條町北東の角家ならびに屋地の事。買得の処、一乱によりこれを捨て置き、御構へ参る。静謐已後立ち帰るべきの処、櫛曳三郎違乱に及ぶと云々。

18 〔政所 賦銘引付〕文明十六年（一四八四）八月二十三日

一、下笠三河入道元秀 一八廿三日

京都大乱の初め、元秀御構（綾小路室町東北類）へ参る処、納所新左衛門尉秀次、元秀の家倉・贓物已下これを押領す。今においては買得の由これを申す。納所を召し出され、御糺明に預かるべきの由と云々。

四、文明六年の和平 一橋を懸け自他の人々往反す一

19 〔親長卿記〕文明六年（一四七四）四月三日

山名と細川と寛宥の事、近日巷説耳に満つるの処、すでに去夕、参会すと云々。よつて橋を懸け自他の人々往反すと云々。およそ大慶か。かつは無為珍重。但し心中の野心を知らず。

（四日）晴。北野に参詣の人これありと云々。山名の陣より誓願寺に参詣すと云々。自他往反勿論也。

（二十一日）晴。北野社本社に参詣す。乱後、通達なきにより各人々参詣せず。去る六

日より通達す。

20〔東寺執行日記〕文明六年四月五日

上下万民、一條橋より知人ヲ尋ね入るト申しテ、人々事(殊)の外出入仕る也。珍重々々。

21〔大乘院寺社雜事記〕文明六年四月八日

京都の儀は、去る三日、山名(政豊)・細川(政元)と対面。両方ニ大慶の由と云々。披官人等(ひかんにん)申し合わすの故か。よつて下京以下の商人等御陣に参る。泰平の儀也と云々。

22〔親長卿記〕文明六年七月十二日

今日、この構より下京土岐屋形(いか)已下に押し寄せ、所々に放火せしむ。殊なる事なく引退し了んぬ。

23〔親長卿記〕文明六年八月十三日

近日小屋路地狭少を以て、あるいは追い立て軒を切る。万民の愁傷比類なし。猶今日予近辺かくのごとし。

(十四日) 予陣屋の東切るべしと云々。

五、乱の終結と町の復興 ― 大裏は五月の麦の中 ―

24〔親長卿記〕文明九年(一四七七)十一月十一日

ここに亥刻許り、敵陣に火事あり。驚き見るの処、畠山修理大夫(義統)自焼すと云々。去る九月比より大内左京大夫御方(みかた)に参るべきの由頻りにこれを申す。御「免」ある間、今夜すでに俄(わか)に引退す。よつて土岐美濃守、畠山修理大夫等自焼せしめ、全て没落す。よつて諸陣皆同じく炎上□□物、すでに十一ヶ年に及び、洛中に自敵陣を並べ堀を隔てるの処、たまたまかくのごときの儀に及ぶ。珍重々々。旧院御所は炎上す。禁裏御留守御所は相残る。珍重々々。

(十二日) 晴。早旦より諸人物忿。敵陣の焼跡に罷り乱妨すと云々。見物の輩経廻の由風聞の間、罷り出てこれを見物す。内裏の外悉く焼失す。但し禁裏は有名無実也。巨細を記録するに及ばず。すなわち参内し、御留守御所拝見の由、あらあら言上し了んぬ。次に今日、武家より内裏相残るの間、武士に仰せられ警固せらる。同じく公家の輩祇候すべきの由仰せ付けられるべきの由申さる間、(中略) すなわち走り向かうの処、すでに堀を越え人々参入す。一人難治。しかるといへども□□難参仕、少々相残る御物等、紫宸殿の内において目録(師富朝臣)これを書く)を取り武士に渡し了んぬ。昨朝拝見の時より障子已下紛失し了んぬ。存内の事か。

25〔晴富宿祢記〕文明十一年(一四七九)二月十三日

室町殿(花御所)御造管御事始め也。

(三月十五日) 室町第(花御所新造あるべきの所)裏築地の在家(乱中に陣屋を立つ。今に在家これあり)、皆撤却せられる。今日これを壊つと云々。又御構の中(乱中御構の内たる所々)町々の巷所の在家皆これを壊つ。今日所司代(浦上則宗)これを相触れ、俄(わか)にこれを撤却す。又簷椽を切るものこれあり。條里本(元)に復するは然るべき事なり。(三月十六日) 公武諸家、乱中、あるいは炎上、あるいは破却によつて沈淪す。然るに今ことごとく本宅の敷地に居るべきの由、御成敗を以て(百姓居住の)所在の小家等皆壊ち取ると云々。

26〔大乘院寺社雜事記〕文明十一年三月六日

京都ハ三寶院門跡これを立(建)てらる。作事、元の在所、土御門万里小路と云々。伊勢守の屋形これを立つ。内者共(うちものども)の各屋共これを立つ。在々所々の作事、室町殿ハ東西行四十丈、南北行六十丈の御地也。然れども南北行四十丈ニツ(築地)イチこれを仰せ付けらる。南方二十丈ニハ小屋共これ在るの故と云々。色々の懸銭共その数を知らず。堺・坂本辺りの町人罷(まか)り上る事斟酌(しやく)せしむと云々。もつとも事なり。諸国の進物ハ一向これなし。かくの如く御成敗なくば、小事も公用あるべからずと云々。

27〔大乘院寺社雜事記〕文明十一年十月十九日

土御門内裏に還幸すと云々。清冷殿(清涼殿)一字これを修理す。西の対屋・長橋、同じく修理す。殿上、同じく修理す。黒戸・春興殿はもとより無為と云々。南殿以下は一切これを打ち捨てらる。四面の築地、四足以下の諸門、一向これなし。建立に及ばず。形の如き儀ばかりなり。近所に在家等これなし。東西ハ西山・東山ニ見融(みと)し、南北ハ二十町ばかり見融(みと)すもの也と云々。仮令(かりよう)日来の内野の官廳の如き也。

28〔大乘院寺社雜事記〕紙背消息 文明十一年十一月一日

一大裏新造御殿と長橋局とハかり修理させられ候、御門一(仮番)かりふきの分にて、還幸なし申候ハんする分に候。但し築地已下八角六角ニ築おきたる式にて候。いかゝ候ても、是非一事あるへく候。一向ニ野中にて候間、四町の内、周備ともいかゝ候候処、きつね風情と同宿、御番の輩出入、事行くべからず候間、種々の沙汰までにて候。

むすび

29〔宗長日記〕大永七年(一五二七)二月十二日

七條わたりの合戦、(中略) 又応仁年中、諸国守御敵となり。京中三分二大堀をかまへ、東西十町、其半に大内左京大夫御敵にくみし上洛、終は降参有御免下国、されは国々の守も散々に下、さてしばらく静謐。
(五月) 関山をこへ、粟田口にいたれども、人ひとりにもあわず。さしも此たうげは、かさをかたぶけ、かたをすり、馬・輿(こ)さりあへざりし道ぞかし。京を見はたし侍れば、上下の家、むかしの十が一もなし。只民屋の耕作業の躰、大裏は五月の麦の中、あさましとも、申にもあまりあるべし。

30〔日本教会史〕(ジョアン・ロドリゲス著)

最初あった南北三十八の道路の中で、上京と下京の二つの市区に分かれていた両区がたがいに続いているのは南北に通ずる中央の道路ただ一つだけとなり、横の道路三十八の中でもごく少数しか残っていないかった。国王と公家の御殿は松の老木で造られ、壁も同じ松の板を使うという惨めさであり、公家の表向きの暮らしはこの上なく惨めで貧しかった。

31〔老人雑話〕(江村専齋著)

信長の時は禁中の徹々成(び)しこと、辺土の民屋にことならず。築地(ついに)杯はなく、竹の垣に茨(いばら)などゆい(結)つけたるさま也。老人、児童の時は遊(あそ)びに往て、縁にて土(つ)なとねやし、破(やぶ)ふれたる簾を折節あけて見れハ、人も無き体也。信長知行なとつけられ、造作など

寄進ありし故に、少し禁中の居なし能なりたり。是によつて信長を御崇敬ありて、高官にも進めらる。